

アリストテレス『分析論後書』における知識の身分

酒井 健太郎

はじめに

アリストテレスの『分析論後書』(以下『後書』)という著作は、プラトンの『メノン』や『テイテトス』と同様に知識論の古典として十分な価値を持っている。それにもかかわらず、この著作の持つ意義は現代に至るまで正当に評価されてきたとは言えない。英米圏において古代哲学の研究が進んだここ半世紀においても、『後書』はあくまでも科学的説明の理論から読まれることが多かった¹。このような読み方は限定的には正しいかもしれないが、私はむしろ、『後書』は知識ないし論証的知識を取り扱った著作として、より広い観点から読まれなければならないと考える。以上のことを踏まえた本稿の目的は、『後書』における論証的知識の構造を明確にし、それがいかなる特徴を持った知識論であるかを明らかにするところにある。

本稿の構成は以下ようになる。まず第一節において、『後書』が論証を主題とし、その明確化を目的として著されたものであるということを簡潔に述べることによって、アリストテレスの問題意識を抽出する。次に第二節において、アリストテレスの知識概念はすでに存在する認識から始まることを確認したうえで、『後書』B 巻において頻繁に登場する月蝕や雷鳴のような自然事象については、その「何であるか」の一部である部分的定義が先立つ認識として必要であることを明らかにする。さらに第三節においては、アリストテレスの知識を「必然性」の観点から探る。Barnes はアリストテレスの知識概念を“high-grade knowledge”と呼んだが、それはアリストテレスが知識に対して厳密な必然性を要求したことに由来する。Patzig はこの必然性が推論形式のような論理的なものに基づくと述べるが、実際にはそうではないと考えられる。本稿では、第二節の考察を踏まえたうえで、存在論を基礎とした知識論をアリストテレスが考えていたと主張する。最後に第四節においては、その知識論の基礎となっている存在論の問題に足を踏み入りたい。先行研究においては、本稿と同じように存在論を基礎とした知識論が Deslauriers ら

によって提唱されているが、彼らは『形而上学』を知識論の基礎として重視している。その際、彼らは『後書』における類・種差と『形而上学』における質料・形相を安易に同定する傾向にある。しかし、そもそも『後書』において質料概念が登場していない以上、そのような同定が可能か否かについては議論の余地があると考えられる。管見では、知識論の基礎として存在論を論じる際には『形而上学』以前に『カテゴリー論』を重視する必要があると思われる。本稿は『カテゴリー論』の議論に本格的に踏み込むつもりはないが、存在論を基礎とした知識論を論じるうえで、『カテゴリー論』に至る道筋を示すことにしたい。

1. 『分析論後書』の目的と論証的知識の構造

われわれは『後書』をどのような観点から読むべきなのか、これを理解するためには『後書』よりむしろ『分析論前書』(以下『前書』)冒頭部を参照することが肝要である。そこでは、「われわれの探求が何について (*peri ti*) であり、その目的が何であるか (*tinou*) ということ、すなわち、これが論証 (*apodeixis*) についてのものであり、その目的が論証的知識 (*episteme apodeiktike*) であるということを最初に言明しなければならない」(*An.Pr.* A1, 24a10-11) と言われている。ここからも理解されるように、アリストテレスの考える知識とは論証と関係しているものである。この論証とはいかなるものか。アリストテレスによれば、論証とは「知識的な推論」(*sylogismon epistemonikon*) であり (71b18)、推論 (*sylogismos*) とは「そこにおいて、或ることどもが[前提として]措定された場合に、これら措定されてあることどもとは別の或ること[結論]が、これら[諸前提]がそうあるということによって、必然に生じてくる論理方式 (*logos*) である」(*An.Pr.* A1, 24b18-20) と言われている。必然性の問題については本稿第三節で扱うが、ここからは少なくとも、前提と結論との論理関係が推論ないし論証と呼ばれていることが明らかである。

それでは、以上のような論証的知識は具体的にいかなる構造を持ったものなのか。『後書』冒頭部において、アリストテレスは「思考の働きが関わる教えることや学ぶことはすべて、すでに存在する認識 (*gnosis*) から生じる」と述べる。何か先立つ認識がなければ、われわれは何も知ることはない。たとえば、アリストテレスにとって感覚による知識には先立つ認識がないため、論証的知識の候補から外れると思われる。B 巻第 19 章では感覚知自体が論証的知識にとって最も先立つものであるということも言われている (B19,

99b26-100a3). 論証的知識の基底にある感覚知の問題も重要ではあるが、それはむしろ論証的知識の外側の問いであると考えられる。

そうすると、この先だつ認識の内実が問題となる。すでに述べられたように、論証的知識は「論証による」知識を意味するので、その構造自体も論証の形式をとると考えられる。『後書』内部においては B 巻第 8 章から第 10 章において月蝕と雷鳴がその具体例として示されている。次節では、『後書』におけるこの具体例を参照することによって、先立つ認識の内実を明らかにしたい。

(1) 知識とは論証の形式を取らねばならず、それはすでに存在する認識から始まらねばならない。

2. 先立つ認識としての部分的定義について²

Demoss and Devereux を始めとした諸解釈者が述べるように、先立つ認識を明らかにするためには以下のテキストが重要であると考えられる³。

T1 ところで、われわれは「あること (ei estin)」を或る時には付帯的に (kata symbebekos) 把握しているが、しかし他の時には「その事物そのものの何か」を把握することによって (echontes ti autou tou pragmatos) 把握している。たとえば、雷鳴を「雲間における或る音響」、月蝕を「光の或る欠如」、人間を「或る動物」、そして魂を「自ら自身を動かすもの」と把握するような場合である。(B8, 93a21-24)

「何であるか」の一部を指す「その事物そのものの何か」を、Demoss and Devereux は「名目的定義」と呼ぶ⁴。たとえば、月蝕の「何であるか」は「地球の介在による月からの光の欠如」である (B2, 90a15-16)。「光の或る欠如」はこの定義の中に含まれる形で、月蝕の「何であるか」に関係している。このような名目的定義によって「何であるか」の一部を把握した後、月蝕の場合には「地球の介在」のような根拠(原因)の把握に向かうというのが、Demoss and Devereux による探求の図式である。

Demoss and Devereux のように名目的定義の問題を考察する際に T1 を重視するという方針は、多くの人々に共有されているものである。たとえば Ackrill は、「完全な定義 (full

definition or complete definition)」と、定義されるべき当の事象の原因(中項)を加えることによって完全な定義となるところの「部分的定義 (partial definition)」とを対比させている。この場合、「雷鳴とは、雲間において火の消滅することによる音響である」という「何であるか」を表す定義が完全な定義であり、「雷鳴とは雲間における或る音響である」という「何であるか」の一部を表す定義が「部分的定義」である⁵。「何であるか」の一部を指す定義は、Ackrill 以外にも Sorabji や Modrak によって同じように部分的定義と呼ばれている⁶。諸研究者は、いわゆる「名目的定義」を部分的定義として捉えているのである。本稿でもこれに従い、「何であるか」の一部を指す定義について述べる際には、これ以降「部分的定義」という名称を用いることにする。

では、この部分的定義を用いることによって、自然事象はいかなる形で探求されていくのか。先に、月蝕について「光の或る欠如」を、雷鳴について「雲間における或る音響」を把握するという事態は、「何であるか」の一部を把握していることだと述べた。アリストテレス探求論のポイントは、このような部分的定義が、「何であるか」の一部を把握するだけでなく、存在を不完全な仕方であれ把握しているところにある。そのことの根拠は以下のテキストのうちに求められる。

- T2 「何であるか」を探求するということは、「それがある」ということ (*hoti estin*) を把握することなしには、何もものをも探求していないということである。しかし、「その事物そのものの何か」を把握しているのであれば、それ[「何であるか」の探求]はより容易なことである。結果として、「あること」を把握していさえすれば、その程度まで「何であるか」に関してさえもわれわれは把握しているのである。(B8, 93a26-29)

「その事物そのものの何か」とは部分的定義のことであった。そうすると、この箇所では、部分的定義の把握と存在の把握が平行に語られていることになる。このことは、事実と根拠を同時に知るのでなければ根拠を知ることにはならないと述べられている(B8, 93a35-37) ことから明らかである。ここでの「事実」とは、たとえば月蝕の場合には、「光の欠如が月に属する」ということである。この「事実」は、以下の定式化からも明らかのように、月蝕の「何であるか」についての論証の結論でもある⁷。

光の欠如が地球の介在に属する.

地球の介在が月に属する.

光の欠如が月に属する.

ここで注意されるべきは、この論証における事実＝結論が、単にそれを見ることによって把握された「光の欠如が月に属する」とは異なるということである。というのも、論証の結論に位置する事実、その根拠の把握を通じて獲得されたものだからである。

つまり、アリストテレス探求論の持つ構造は次のようなものである。まず、われわれは目で見ることによって、月蝕がまさに生じているという事実を把握する。この事実把握は、「何ゆえに」の欠けている、根拠のない事実把握であるが、「その事物そのものの何か」＝部分的定義としての「光の欠如」は把握されている。その後、光の欠如が月に属する原因を探求することによって、月蝕が「何ゆえに」生じるのかをわれわれは知る。その原因を含んだ形で論証を構成することによって、月蝕の真正な定義である「[月と太陽の間の]地球の介在による光の欠如」(B2, 90a15-16) が論証全体から示される (B8, 93b16-18)。そしてそれと同時に、根拠＝中項を通じた事実＝結論があらためて把握されるのである。

以上から、われわれが部分的定義を把握する時には、存在を不完全な仕方で(根拠なしの事実として)把握していると言うことができる。不完全な仕方であれ存在が事実として把握されているからこそ、その事実の根拠を探求するという形で探求が進んでいくのである。そしてこの根拠を探求していく過程において、存在の把握もまた進行する。最終的に、根拠ないし「何であるか」が論証において示されたとき、われわれの存在把握もまた完全なものとなるのである。つまり、部分的定義とは「特定の学における存在証明の前段階として機能する定義」なのである。

本節で明らかになったことは、探求における自然事象の存在把握は、「何であるか」の把握と並行して行われるものだけということである。ここで重要な点は、探求対象であるところの月蝕や雷鳴のような事象の存在をアリストテレスが疑っていないということである。事象の存在は、探求の端初においてすでに事実として受け入れられている。それでもアリストテレスが事象の存在を「証明する」と述べるのは、学の対象としての事象の存在把握が、その根拠と「何であるか」を度外視した形ではありえないからである。

以上の考察から理解されるように、「すでに存在する認識」とは「事物そのものの何か」としての部分的定義の把握のことである。次節では、知識に対するさらなる規定を必然性の観点から明らかにすることにする。

(2) 知識とは、すでに存在する認識から始まり、その認識は対象 X の「何であるか」の一部(部分的定義)でなければならない。その「何であるか」が論証形式によって明らかにされる。

3. 必然性の要請と存在論に基礎づけられた知識論⁸

アリストテレスの知識論を考察するうえで、A 巻第 2 章冒頭のテキストは重要である。ここでは、厳密な意味で知ること、つまり「学的に知ること (epistasthai)」の二つの条件が述べられている。以下で引用される箇所は、アリストテレスによる epistasthai の明確な定義である。

T3 或るもの(X)を、ソフィスト的な付帯的な仕方ではなくて、端的な意味で学的に知る (epistasthai) とわれわれが考えるのは、(A) 事物 (pragma) [X] がそれによってそうである原因 (aitia) [Y] を、それ [Y] がその事物 [X] の原因であり (hoti ekeinou aitia esti), (B) これ (touto) が他ではありえないと知っているときである。
(A2, 71b9-12)

epistasthai のためには (A) と (B) の条件が必要であり、これらは以下のように定式化可能である。

(A) X の原因が Y であると知る。

(B) これ (touto) が他ではありえないことを、つまり「必然的であること」を知る。

学的知識のためのこの二つの条件には、研究者たちを悩ませてきた一つの大きな問題がある。その問題は、(B) における「これ (touto)」という指示代名詞が指しているものについてである。ここには二つの解釈が存在する。

(B-1)「これ (touto)」は事物 (X) を、つまり論証の結論を指す。

(B-2)「これ (touto)」は「それがその事柄の原因であり (hoti ekeinou aitia esti)」という句を、つまり原因 (Y) を指す。

大多数の研究者は (B-1) の解釈をとる⁹。この場合、(B) で述べられている「これ (touto)」は「事物 (pragma)」を指しており、それは結局のところ「論証の結論」のことを意味していると解されることとなる。この解釈では、(B) で述べられていることは「学的に知るためには論証の結論が必然的でなければならない」ということになる。ただし、(B-1) の解釈をとれば、アリストテレスが「結論の必然性 (necessitas consequentis)」と「推論の必然性 (necessitas consequentiae)」を混同しているという批判を何らかの形でかわさなければならなくなる。(B-1) と異なり、(B-2) の解釈をとる研究者は少数であるが、そこでは必然性の混同の批判を避けることが可能となる。この解釈では、(B) で述べられていることは「原因が他でありえないこと」になる。つまり、この解釈では、論証がそれを通してなされる中項(原因)の必然性が問題となるのである¹⁰。

アリストテレスにおける必然性概念を考察する際の一つの方向性は、Patzigによって与えられた。Patzig は、アリストテレスの「必然性」は形而上学的背景に支えられているものではないと主張し、形而上学の基礎としての論理学を提唱する¹¹。つまり、必然性の源泉は厳密な意味での論理的なもののうちのみ認められ、それを世界の側に求めるような議論が非難されているのである。

注意される必要があるのは、この文脈で意図されている必然性は、『前書』における必然性だということである。われわれが問題にしてきた必然性は『後書』におけるものであり、そこでの必然性は豊富な自然事象の例によっても支えられている。『前書』と『後書』が密接な関係のうちにあり、相互にテキスト上の重要な論点があることは疑いない。しかし、『後書』における知識の必然性についての議論は、『前書』の必然性についての議論と区別して考える必要があるのではないだろうか¹²。このような方針をとる一つの根拠は、本稿第二節において示された月蝕の例からも明らかのように、『後書』における中項が自然事象の原因と同定されているというところにある (B2, 90a6-7)。『前書』における論証は自然事象の具体的解明に向かわないため、そこでの中項が自然事象の原因と同定されることはない。それに反して、自然事象の「何であるか」を探求する際には中項と原因

が同定されねばならない。Sorabji が明らかにしたように、アリストテレスの必然性は(広い意味での)論理的ないし概念的必然性に限られるものではない¹³。そうすると、『後書』において知識の必然性を考察する際には、『前書』よりもむしろ B 巻における記述を参照すべきである。

ここで予想される反論は、A 巻において提出されている例は数学的な例がほとんどであるため、必然性問題を考察する際には『前書』における論理的必然性を考慮に入れなければならないのではないか、というものである。アリストテレスが A 巻において数学的な例を多数提出しているという事実は、『後書』を読む人を演繹的公理体系に注目させるのに十分な効力を発揮する。しかし、A 巻において自然事象を例として挙げる場面が皆無というわけではない(e.g. A4, 73b11-13)。以上のような理由から、『後書』の文脈を『前書』から切り離れた形で考察することは、知識の必然性に関する限りにおいて一定の正当性を持ったものであることが理解されるだろう。

ここまでの考察を踏まえて、アリストテレスが (B-1) 結論の必然性と (B-2) 中項の必然性のどちらを考えていたのか、という問題に答えを出さねばならない。ここでは、A 巻第 6 章における「中項が必然的であるときには、結論もまた必然的である」(A6, 75a4-5, cf. 75a12-14) というような記述に注意しなければならない¹⁴。前提命題が必然的であるのは、前提命題のそれぞれが、論証される事象の「何であるか」の一部を表現しているからである。たとえば、月蝕の「何であるか」は「地球の介在による光の欠如」であるが、この「地球の介在」と「光の欠如」はそれぞれ、月蝕の「何であるか」の論証における大前提と小前提のうちに含まれている。この場合の前提命題のそれぞれにおける中項は、月蝕に対する「地球の介在」のように論証される事象の原因である。つまり、何かについての論証の結論が必然的であるためには、前提命題が必然的であるだけでなく、その前提命題それぞれを繋ぐところの中項が必然的でなければならない。その中項が必然的であるのは、論証される事象の「何であるか」の一部であるところの原因を示しているからである。

そうすると、結論の必然性は中項の必然性から派生的に出てくるのであり、われわれは (B-2) の読みをとらねばならないのだろうか。ここで想定される反論は、A 巻第 6 章における中項の必然性が、A 巻第 2 章における (B) の必然性と必ずしも同定されないのではないかというものである¹⁵。この反論は強力なものであり、確かに、A 巻第 6 章と A 巻第 2 章で同じ必然性が扱われていることを保証するものは何もないように思われる。

本稿では、この反論に正面から応答するのではなく、B 巻における自然事象の例に再

度戻ることとする¹⁶。『後書』において中項が原因と同定されていることは先に述べた。この中項＝原因はさらに根拠とも言い換えられるのであるが、本稿第二節でも触れたように、事実と根拠を同時に知るのだから根拠を知ることはならないとアリストテレスは述べている (B8, 93a35-37)。たとえば、月蝕のような事実(事象)の「何であるか」を論証によって示すためには、本稿第二節で提示されたような論証が必要となる¹⁷。この場合に、われわれは「光の欠如が月に属する」という結論と、「地球の介在」という中項を同時に把握する。つまり、アリストテレスにおいては、事実(結論)の把握と中項の把握は同時に行われなければならないのである。

おそらく、アリストテレスが知識の必然性ということを書くとき、(B-1) と (B-2) の区別はそれほど重要なものではなかった¹⁸。というのも、この二つはアリストテレスにとって不可分なものであり、一方を他方から切り離して考察するということがアリストテレスの念頭になかったからである¹⁹。以上の考察から、知識の必然性のためには結論と中項の両方が必然的でなければならず、結論と中項の必然性は世界における事象の「何であるか」にその根拠を持つということが明らかとなった。次節では、知識の存在論への依存について『前書』と『カテゴリー論』を参照しつつ論じる。

(3) 知識とは、対象 X がそれ以外でありえないことを、中項としての原因を通じて認識することである。その原因とはすでに存在するところの、対象 X の「何であるか」の一部である認識でなければならない。また、論証形式によって明らかにされるところの、世界の側にある「何であるか」に、知識の必然性は依存する。

4. 『分析論後書』から『カテゴリー論』へ

前節において論じたような『後書』における知識論の存在論的依存については本稿のみが述べているわけではない。Deslauriers をはじめとした論者たちも『後書』の基礎として存在論が存在することを指摘している²⁰。ただし、その際の彼らの議論には問題点があると考えられる。それは、『後書』における「何であるか (ti estin)」と『形而上学』における「本質 (to ti en einai)」を容易に同定しているところである。確かにそのように考えれば、『後書』における類と種差をそれぞれ『形而上学』における質料と形相に同定することができ、知識論の基礎として存在論を提出することができる。しかし、to ti en einai という言

葉自体は『後書』において幾度か使用されているが²¹、主要なトピックとして取り上げられているわけではない。そうすると、その本質概念を分析するために提出された質料概念と形相概念を『後書』の基礎として要請することは、詳細な考察を行ったうえでなければ不可能である。Deslauriers らの提出したアイディアは尊重されるべきであるが、その論証過程は改訂する必要があると考えられる。つまり、『後書』と『形而上学』の間に媒介物が必要なのである。

本稿ではその媒介物の候補として『カテゴリー論』を提出したい。その理由は、『後書』において「述語づけられる (kategorēsthai)」という言葉が頻出しているところにある。「何であるか」のために「述語づけられる」という言葉を使用することは『カテゴリー論』においても頻繁に行われている。本節では『後書』から『カテゴリー論』に至る道筋を見出すため、まずは『カテゴリー論』と関わりが深いテキストと考えられる『前書』A 巻第 27 章を見ることにする²²。

その際に問題となるのは以下のテキストである。

T4 すべての〈あるもの〉のうちで (ton onton), [1] 或るものどもは他のいかなるものについても、真の意味では、全体について述語づけられる (kata … kategorēsthai) ことなく (たとえばクレオンやカリアス, すなわち個別的なものであり感覚されるもの), むしろ他のものがこれらに述語づけられるようなものどもである(というのも、これらのそれぞれが人間でも動物でもあるからである)。また, [2] 或るものどもは、それら自体は他のものについて述語づけられるが、それらについて他のものどもがより先に述語づけられることはない。さらに, [3] 他のものどもはそれら自体が他のものについて述語づけられるし、他のものどもがそれらに述語づけられもする。たとえば、人間はカリアスに述語づけられるし、人間に動物が述語づけられるのである。(43a25-32)

ここでは〈あるもの〉が以下の三つに峻別されている。

[1] 個体実体：他のいかなるものについても述語づけられることなく、他のものがこれらに述語づけられる。

[2] 最高類：それら自体は他のものについて述語づけられるが、それらについて他

のものどもがより先に述語づけられることはない。

[3] 普遍実体：それら自体が他のものについて述語づけられるし、他のものどもがそれらに述語づけられもする。

また、『カテゴリー論』第2章においても〈あるもの〉が述語づけと内属性の観点から四種類に峻別されている。

- (1) 普遍実体：或る基体について (kath' hypokeimenou tinos) 述べられるが、いかなる基体のうちにも (en hypokeimenoi ... oudeni) あることはない。(Cat. 1a20-21)
- (2) 個体属性：基体のうちにあるが、いかなる基体についても述べられない。(1a23-24)
- (3) 普遍属性：基体について述べられ、かつ基体のうちにある。(1a29-1b1)
- (4) 個体実体：基体のうちになく、基体について述べられない。(1b3-4)

一見して理解されるように、『カテゴリー論』における(1)と(4)は『前書』における[3]と[1]に対応する。宙に浮いてしまった[2]最高類に関しても、『カテゴリー論』第4章において、10のカテゴリーが列挙されている事情に鑑みれば問題はないだろう。『前書』における議論には明らかに『カテゴリー論』で提案された〈あるもの〉の区別が反映されている。

さて、先の『前書』の引用箇所から明らかなのは、[2]最高類も(4)=[1]個体実体も推論の中項として機能できないということである。(1)=[3]普遍実体こそがその役割を果たす。推論における中項の特徴は、大項について述語づけられ、かつ、小項がそれについて述語づけられるものであるということである。それでは、中項がそのような役割を果たすためには、いかなる普遍実体なのかを考察する必要があるだろう。

ここで重要なことは、アリストテレスは『前書』において明らかに中項の外延について関心を持っているということである。たとえば、『前書』A巻第4章においては、「私が『中項』と呼ぶのは、それ自体が他のものの中にあり、他のものがこれのうちにあるものであり、位置においても中間となっているもののことである」(25b35-36)とか、「私が『大端項』と言うのはそれのうちに中項があるところの端項であり、『小端項』とは中項の下にあるところのものである」(26a21-23)とされている。Harariの述べるように、中項は外延

において小項よりも広く大項よりも狭い²³。このような外延関係の典型例は、アリストテレスにおいては明らかにカテゴリーにおける類種関係である。たとえば、まさにアリストテレス『カテゴリー論』第3章において、述語づけの推移性を以下のテキストによって論じている。

- T5 或るもの [B] が基体としての他のもの [A] について述語づけられる (kategorētai) ときに、述語づけられるもの [A] について述べられるところのものども [C] は、すべてその基体 [B] についても述べられるだろう。たとえば、人間 [B] はこの或る人間 [A] について述語づけられ、そして動物 [C] は人間 [B] について述語づけられる。従って、動物 [C] はこの或る人間 [A] についても述語づけられるだろう。というのも、この或る人間 [A] は人間 [B] でも動物 [C] でもあるからである。(Cat. 1b10-15)

この箇所の述語づけの例は推論の形に定式化可能である。

人間は動物である。

この或る人間は人間である。

この或る人間は動物である。

この推論において、中項「人間」は、大項「動物」よりも外延が狭く、小項「この或る人間」よりも外延が広い。無論、アリストテレスが『前書』ないし『後書』で考えている学的論証においては、項はすべて普遍でなければならないが、『カテゴリー論』における以上の例は中項の身分を理解するために役立つ²⁴。

以上のような或る種単純明快な考察はもちろん問題点を持っている。それは、『後書』において展開される論証理論は、明らかにカテゴリー論の影響から逃れているように思われる点である。たとえば『後書』において月蝕の「何であるか」を論証するためには、本稿第二節において提出された月蝕の論証例が必要である。この定式のうちには実体や質のカテゴリーの系列は見つけられない。むしろこれは、蝕のような属性が月のような実体に帰属する内属関係のように見えるかもしれない²⁵。『分析論』における議論が存在

論に依存するという上述の考察には無理があるのだろうか。この問題については次のように答えることにしよう。

『分析論』の議論が存在論に依存しているのは、カテゴリー体系に依存しているということの意味しない²⁶。カテゴリーと不可分な項の間の外延関係に依存しているのである。ただし、その項がいずれも『後書』において〈あるもの〉の区分であり、『カテゴリー論』において〈あるもの〉同士の述語づけの関係から外延関係の議論が生じていたことを思い起こせば、ここでの外延関係が純粋に論理的なものではないことは明らかである²⁷。すなわち、推論における諸項は〈あるもの〉であり、諸項の関係はカテゴリーの理論から生じてくる外延関係に依存するのである。

(4) 知識とは、対象 X がそれ以外でありえないことを、原因を通じて認識することである。その原因とはすでに存在する認識のことであり、その認識は対象 X の「何であるか」の一部でなければならない。また、論証形式によって明らかにされるところの、世界の側にある「何であるか」に、知識の必然性は依存する。ここでの存在論的依存はカテゴリー体系への直接の依存というわけではなく、カテゴリー体系から派生する〈あるもの〉としての項の間の外延関係への依存である。

おわりに

アリストテレス知識論の特徴は、何よりもそれが存在論に依存するところに求められる。以上のような論証に基づいた知識は現代のわれわれから見て様々な面で問題をはらんだものである。知識獲得のために論証という方法を用いることはより正当化される必要があるし、その限りにおいて、アリストテレスの知識論はドグマティックなものとして批判される必要があるのは当然であろう。しかし、Zagzebski が述べるように、知識と外的世界との関係を語ることは知識論の重要な課題の一つである²⁸。その外的世界の候補の一つとしてアリストテレス哲学内部の存在論を提出することは、知識の基礎としての論理を重視する方向性に傾いてきた近年のアリストテレス解釈に対するアンチテーゼとしても重要なものではないだろうか²⁹。アリストテレス哲学には知識論と存在論を架橋する可能性が秘められていると言っても過言ではない。

今後は、本稿最終節で荒削りに示された知識論と存在論の関係を、『カテゴリー論』研

究を発展させることでより詳細な形で示していくことを課題としたい。

註

1. e.g. Ackrill (1981), Bumyeat (1981).
2. 本節は拙稿 2013a 第二節に加筆修正を施したものである。
3. Demoss and Devereux (1988: 136-152).
4. B 巻第 10 章には、事物の付帯的な把握からは「何であるか」について探求を行うことは困難であり、「その困難の原因は以前に述べられていた」(B10, 93b33-34) という言明がある。この「以前に (proteron)」の指示する箇所は諸研究者によって、B 巻第 8 章における「その事物そのものの何か」に言及している箇所であると考えられている (Ross (1949: 636), Barnes (1993: 223))。このことから、B 巻第 10 章における名目的定義と、付帯的把握ではない「その事物そのものの何か」が同定されるという解釈が生まれるのである。また Modrak (2010: 257) は、B 巻第 7 章で扱われた定義と論証についての難問の解決法が B 巻第 8 章で提示されているという理由から、「その事物そのものの何か」を名目的定義の具体例と考えている。
5. cf. Ackrill (1981: 361, 373-37).
6. cf. Sorabji (1981: 215), Modrak (2010: 257)。また、Deslauriers (2007: 79) も参照。
7. この定式化は B8, 93a30-33 から獲得される。
8. 本節は拙稿 2013b に加筆修正を施したものである。
9. cf. Sorabji (1980: 49, n. 18), Bumyeat (1981: 106), McKirahan (1992: 23), Barnes (1993: 90)。
10. cf. Lylod (1981: 157, n. 2), 加藤 (1997: 310, 329, n. 10)。
11. cf. Patzig (1968: 41)。
12. 千葉 (1981) も、『前書』と『後書』の問題意識が違うということを指摘している。また、Modrak (2001: 67) の立場も、論証の必然性のために『命題論』や『前書』ではなくて『後書』を探求しなければならぬというものである。
13. cf. Sorabji (1980: 222-224)。
14. この直前の「結論が必然的であるときに、結論がそれを通じて証明された中項が必然的でないことを妨げるものはない」(A6, 75a1-2) というテキストは問題にならない。Ross (1949: 528-529) の述べるように、その場合には、証明をする当の人は、証明の根拠を知らないか、あるいは結論が必然的であることすら知らないかのいずれかだからである。また Bumyeat (1981: 110-111) も参照。
15. Sorabji (1980: 49)。なお、河谷 (1996: 51) も参照。
16. 以下の解釈の示唆は河谷 (1996: 52-53) から得た。しかし、本稿の解釈はより詳細な B 巻解釈を加えたという点で、河谷のものとは異なっている。
17. 本稿第二節において提示された、月蝕の「何であるか」についての論証を参照。
18. Kneale and Kneale (1962: 95) の指摘するように、アリストテレスにとっては、前提のうちのみ生じる必然性と、前提と結論との繋がりを示す必然性との区別さえも重要なものではなかったのかもしれない。
19. この解釈をとることによって、本節で先に触れられた A 巻第 6 章と A 巻第 2 章における必然性の問題も、問題でなくなるだろう。
20. Deslauriers (2007: 150-156) は類は種の、質料は形相の可能態として類比的に捉えられるとして類と質料を同定している。同様の見解を持つものとして LeBlond (1971) や Charles (2000: esp. 288-289) も参照。本稿では紙幅の都合上触れられないが、原因や説明の観点から類と質料を同定している

- Charles の見解については別の機会に詳しく論じる必要がある。
21. Bonitz (1870: 763-765).
 22. Waitz (1844: 442) など『前書』の該当箇所について 'Hoc fundamentum nititur categoriarum divisione' と述べている。
 23. Harari (2004: 77).
 24. Ackrill (1963: 76) も、ここでアリストテレスは個と種の関係と種と類の関係を区別していないと考えている。この箇所でも重要なのはあくまでも述語づけ関係による推移性なのである。
 25. Deslauriers (2007: 62, n. 24) が述べるように、月が実体が否かについては論争の余地がある。本文中の月蝕はあくまでも例として用いられていることに注意されたい。
 26. Striker (2009: 190) も『前書』A 巻第 27 章の当該テキストがカテゴリーについてのものであることに疑義を呈している。ただし、彼女はわれわれと異なり、この箇所の議論が『分析論』の存在論への依存を示しているとは解していない。
 27. Ackrill (1963: 71, 75) によれば、『カテゴリー論』の議論が対象としているものも名ではなくあるもの』である。
 28. Zagzebski (2009: 1).
 29. 最後に、本稿の解釈史的立場づけについて付言しておきたい。アリストテレス論理学(ひいては知識論)解釈の被ってきた歴史的変遷については Patzig (1968: 194) が詳しい。彼によれば、啓蒙主義者やプラグマティストによるアリストテレスに対する誤解に基づいた批判への反感から生じたものとして 19 世紀ドイツでは論理学の基礎として形而上学ないし存在論的基礎を主張することが流行していた。Patzig の研究はその流行への警鐘という意味合いを持つものである。それに対して、本稿におけるわれわれの主張は 19 世紀ドイツにおけるアリストテレス解釈方向の妥当性を大枠で認めつつ、それを洗練した形にするため『カテゴリー論』への道筋を作ったものとして理解されたい。

参考文献

- Akrill, John L. (1963). *Aristotle's Categories and De Interpretatione, Translated with a Notes and Glossary*, Oxford, Oxford University Press.
- , (1981). 'Aristotle's Theory of Definition: Some Questions on *Posterior Analytics* II 8-10', in Berti, Enrico, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Pauda, Antenore, pp. 359-384.
- Barnes, Jonathan (1993). *Aristotle's Posterior Analytics, Translated with a Commentary*, 2nd ed., Oxford, Oxford University Press.
- Bolton, Robert (1976). 'Essentialism and Semantic theory in Aristotle: *Posterior Analytics*, II, 7-10', *The Philosophical Review* 85, no. 4, pp. 514-544.
- Bonitz, Hermann (1870). *Index Aristotelicus*, Berlin.
- Bumyeat, M.F. (1981). 'Aristotle on Understanding Knowledge', in Berti, Enrico, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Pauda, Antenore, pp. 97-139.

- Charles, David (2000). *Aristotle on Meaning and Essence*, Oxford, Oxford University Press.
- , ed. (2010). *Definition in Greek Philosophy*, Oxford, Oxford University Press.
- 千葉恵 (1981). 『分析論後書』における自体性の問題——episteme の成立根拠をめぐって——, 『哲学』第73集, pp. 1-24.
- Demoss, David and Devereux, Daniel (1988) ‘Essence, Existence, and Nominal Definition in Aristotle’s *Posterior Analytics* II 8-10’, *Phronesis* 33, no. 2, pp. 136-152.
- Deslauriers, Marguerite (2007). *Aristotle on Definition*, in the *Philosophia Antiqua*, Leiden, Brill.
- Goldin, Owen (1996). *Explaining an Eclipse: Aristotle’s Posterior Analytics 2.1-10*, The University of Michigan Press.
- Harari, O. (2004). *Knowledge and Demonstration: Aristotle’s Posterior Analytics*, Kluwer Academic Publishers.
- 加藤信朗訳註 (1971). 『分析論後書』, アリストテレス全集第1巻, 東京, 岩波書店.
- , (1997). 『分析論後書』における『普遍(katholou)』の把握, 『哲学の道——初期哲学論集』, 東京, 創文社, pp. 305-330.
- 河谷淳 (1996). 「論証と必然性——『分析論後書』における『自体性』と『必然性』(その二)——」, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』14, pp. 48-59.
- Kneale, William and Kneale, Martha (1962). *The Development of Logic*, Oxford, Oxford University Press.
- LeBlond, J. M. (1971). ‘Aristotle on Definition’, *Articles on Aristotle*, vol.1, Duchworth, pp. 63-81.
- Liddle, Henry George, Scott, Robert, and Jones, Henry Stuart (1996). *A Greek-English Lexicon*, Oxford, Oxford University Press.
- Lylod, A. C. (1981). ‘Necessity and Essence in the Posterior Analytics’, in Berti, Enrico, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Pauda, Antenore, pp. 157-171.
- McKirahan, Richard, D. (1992). *Principles and Proofs: Aristotle’s Theory of Demonstrative Science*, Princeton, Princeton University Press.
- Minio-Paluello, L. (1949). *Aristotelis Categoriae et Liber De Interpretatione*, Oxford, Oxford University Press.
- Modrak, Deborah (2001). *Aristotle’s Theory of Language and Meaning*, Cambridge, Cambridge University Press.

- , (2010). ‘Nominal Definition in Aristotle’, in Charles, pp. 252-285.
- Patzig, Günther, (1968). *Aristotle’s Theory of the Syllogism*, Translated by Jonathan Barnes, Dordrecht, D. Reidel Publishing Company.
- Ross, W. D. (1949). *Aristotle’s Prior and Posterior Analytics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford, Oxford University Press.
- , and Minio-Paluello, L. (1964). *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora*, Oxford, Oxford University Press.
- 酒井健太朗 (2013a). 「名目的定義と部分的定義——アリストテレス『分析論後書』における探求論——」, 『哲学論文集 49 』, pp. 19-35.
- , (2013b). 「知識の必然性について——アリストテレス『分析論後書』A 巻を手がかりとして——」, 『西日本哲学年報 21 』, pp. 1-16.
- Sorabji, Richard (1980). *Necessity, Cause and Blame: Perspective on Aristotle’s theory*, London, Duckworth.
- , (1981). ‘Definitions: Why Necessary and in What Way?’, in Berti, Enrico, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Pauda, Antenore, pp. 205-244.
- Striker, Gisela (2009). *Aristotle Prior Analytics Book I, Translated with an Introduction and Commentary*, Oxford, Oxford University Press.
- Waitz, Theodor (1844). *Aristotelis organon graece. Novis codicum auxiliis adiutus recognovit, scholiis ineditis et commentario instruxit Theodorus Waitz*, Leipzig, Hahn.
- Zagzebski, Linda (2009). *On Epistemology*, Belmont, Calif., Wadsworth.